

# ロンボを売る女性たちの生活戦略

－ ザンビア西部に住む移住民の現金稼得活動 －

村尾るみこ

## はじめに

アフリカにおいて、紛争から逃れて近隣諸国へと移動した人びとのうち、難民認定を受けないまま農村部に定着する人口は、認定を受けた人口の約3倍と推計されている。彼らは定着後、庇護国の政治経済変動や地域社会による制約を受けながらも、援助に頼らず自主的に生計活動を営んでいるといわれる。そうした新たな環境で自主的な生計活動が展開するプロセスについては、難民支援に具体案を示し得るとして、主に庇護国における諸制度や周辺住民と関連づけて注目されてきた。しかしながら、彼らの自主的活動を支える社会組織とそこでの生活戦略から、自主的活動の実態を報告するものは少ない。そこで本稿は、移住先のザンビアにおける政治経済変動と制約のなかで、アンゴラからの移住民が捻出した現金稼得活動、ロンボ販売に関わるモノのやりとりを事例にとりあげ、生計を担う女性たちによる日常的な対応を社会関係の維持の観点から明らかにしたい。

## 1. アンゴラからの移住民の生計活動

本稿で扱うアンゴラからの移住民は、アンゴラ紛争から逃れてきた人びとと、それ以前から生活適地を求めて移り住んできた人びとの双方を指している。ザンビア西部のLN村は、こうしたアンゴラからの移住民が住んでいる村のひとつで、ザンベジ川氾濫原の東岸に位置する。村の歴史は、1947年に十数人が生活適地を求めて移住したことに端を発している。その後、アンゴラ紛争から逃れた人びとも移住してきたので、2004年4月現在で79世帯289人が居住するまでに増加した。この人口の25%に当たる72人がアンゴラ生まれであるが、うち紛争を理由に移住した者は43人と全人口の15%を占めている。村の人びとは、バンツー系農耕民で、ンブンダ、ルチャジ、ルバレ、チョクエのいずれかの民族集団に属する。

このLN村の人びとは、農耕や漁撈、採集、家禽の飼養、木材の切り出しなどアンゴラでもおこなっていた生業を営む。しかし今日の生業形態は、

移住後彼らにかかるようになった制約から強く影響されている。かつてザンベジ川氾濫原にはロジ王国が築かれていたが、その王国組織が今日までこの地域の資源利用を統率している。そのため移住民は、氾濫原などの肥沃な低地を耕地や漁場、放牧地として占有しないよう、利用を制限されてきたのである。彼らは現在も、ロジが利用してこなかったウッドランドの焼畑と屋敷畑で、農耕に特化した活動を余儀なくされている。その上、ウッドランドには痩せた砂土が堆積するため、自給可能な栽培作物はキャッサバに限られている。

また調査地は、首都から700キロメートルも離れた辺境の地であるため、現金稼得の機会も限られる。例えば男性の現金稼得には、村外でおこなう木材の切り出しや出稼ぎがある。また女性の場合には、県庁の公設市場で購入した嗅ぎタバコやトウモロコシの粉等を村内で小売りしたり、村で醸造した酒を販売することがある。しかしどれも季節限定的である、元手がかかる、掛売りなどによる現金回収率が低いなどの理由により、安定して日銭を確保するには不都合な点が多い。そのためこの地域では、痩せた土地で収穫されるキャッサバが、自給可能な主食作物であるだけでなく、現金を得るための唯一の資源となっている。

## 2. ロンボの発案と販売の広がり

移住民は移住直後から主食作物や交換財としてキャッサバに依存していたが、1990年代以降はザンビアで構造調整政策が本格化するなかで生活が悪化し、より安定的に現金を稼ぐ必要性が増大した。

1990年代後半、調査地の隣村に住むある男性が、キャッサバを加工してロンボを発案し、販売するようになった。ロンボとは、収穫後のキャッ

サバを3、4日間水に浸して発酵させた後、皮ごとゆでてつくる酸味のあるスナックである。ロンボは皮さえむけば、歩きながらでも手軽に食べられる上、安価であるので、すぐに市場で人気のスナックとなった。

その後、彼をまねた人びとによってロンボ販売は近隣の市場などで急速に拡大していったが、その担い手は男性ではなく女性である。これはキャッサバの発酵・製粉および調理が従来女性の仕事であり、その延長としてロンボへの加工と販売が始まったためと説明される。そして今日では、ロンボ販売による現金収入は、動物性タンパク質や日用品の購入のほか、農作業の労賃、学費、医療費など移住民の生活全般を支えるようになった。

## 3. モノの不足を補う社会組織

ところがロンボ販売には、大きな問題がある。それは、ロンボの材料となるキャッサバの不足である。以下では、移住民の社会組織を説明しながら、この不足について検討したい。

移住民の社会では共通して、3～4世代の親族が共住する、リンボと呼ばれる社会組織が構成される(Oppen[1996])。LN村の場合、23のリンボが集まって一つの行政村を構成している。それぞれのリンボは、原則的に母系制の夫方居住をとり、儀礼や会合を統率する男性のヘッドマンを中心として、ヘッドマンの姉妹や婚入した女性、彼らの子供たちでつづられている。そして当然ながら、異なるリンボに住む者同士が親族関係で結ばれていることもある。

リンボのヘッドマンの役職は、基本的に母系親族で継承されるが、個人間での土地や家畜といった財の相続はほとんどみられない。また焼畑の経営単位はたいてい個人で、それぞれの畑から収穫



市場でのロンボ販売：桶にあるロンボは1本単位で売られる（筆者撮影）

される作物は、夫婦であっても事前に承諾が求められるなど、個人のモノとして認識される。

このロンボは、互助的に生計を営む単位となっている。しかしそのメンバー構成は非常に流動性が高い。移住民たちはロンボ間を頻繁に移動する。なかには、新たに生活適地を求めて移入・移出する者もいるが、ロンボ間の移動でとりわけ目立つのが離婚と結婚を一生のうち2、3回と繰り返す女性たちの存在である。この社会では、婚入した女性やその子供は女性の母方親族の住むロンボの成員と考えられており、離婚すると母方のロンボに帰ることになっている。しかしアンゴラに母方親族のロンボがある女性たちはそのロンボへ行くことができないので、関係が遠くても受け入れてくれる親族を求めて移動を繰り返さざるを得ない者もいる。実際、調査地では2004年からの3年間で、112人が移出し、133人が移入している。このうちの実に8割前後は、結婚や離婚を理由に移動した女性とその子供たちである。運搬等で労

力のかかるロンボの売り子となるのは、初婚を迎える10代後半から離婚と再婚を繰り返す30代前半までの、まさに頻繁に移動する女性たちが中心となる。

また、そうして女性があるロンボから移動する時は、耕地をそのロンボに返し、移動先のロンボで新たに耕地を得てキャッサバ耕作を開始することになっている。しかし、調査地でさかんに栽培されるキャッサバの品種は、収穫まで1年以上かかるため、移動後は

自分のキャッサバが収穫できない状態となる。つまり、ロンボ販売の担い手である若い女性たちは、実質的には頻繁に、ロンボの材料となるキャッサバが不足するという状況に陥ってしまう。そのため女性たちは、キャッサバの不足を補うために、同一ロンボ内外で頻繁にキャッサバのやりとりをおこなっている。それでは次に、どのようにキャッサバがやりとりされるのかを検討したい。

#### 4．生計を支える社会組織の維持

表1は、あるロンボに住む女性のうち、2003年11月から9カ月間にロンボを販売したすべての女性について、それぞれの販売回数と各回のキャッサバの入手先を示している。彼女たち8人は結婚や離婚を期に移動してきた者や、母方の親族の多くがアンゴラにおり、ザンビアにいる数少ない母方親族に身を寄せるために近年このロンボへ来た女性である。主に若い女性がロンボ販売の担

い手となることは前述したが、表の女性たちの年齢を見てみると、No. 7のように、年長者であっても移動してきたばかりであれば、新たな生活に必要な現金を獲得するためリンボを販売する。そうして売り子となる女性たちは、自分の耕作するキャッサバだけでは十分な量が収穫できない場合に、同じリンボの父母や親族、さらには異なるリンボの親族や知人からも入手する。そうした入手先は、リンボ長とその妻など役職があるために比較的一つのリンボから動きにくく、広大な面積を有しているメンバーとなる。そのため、同じリンボのなかでも、数人の入手先が同じ人物に集中しがちとなる。例えば表1のNo. 1や2を見てみると、1の父親でかつ2の夫の父方親族に当たる同じ男性から入手している。また姉妹であるNo. 3、4および6は母親から入手しているが、この母親は孫に当たるNo. 4の娘5や、従妹に当たるNo. 7とその娘8など比較的遠い関係の女性の入手先

ともなっている。

この一方で、全販売回数に占める割合は少ないが、表のNo. 2、3、5、6、7のように異なるリンボの親族や友人たちからキャッサバを入手することもある。これらは、異なるリンボの親族から販売を依頼されたり、また親族関係はなくとも親しくなった知人に自分から申し出て販売を請け負った場合である。ただしこの8人の例でも示されるように、一般に異なるリンボからのみ入手することはない。

販売後、女性たちはあらかじめ交渉した内容に沿って見返りのモノをやりとりする。同じリンボの者同士で売り上げ利益を配分する場合、利益はすべて販売した女性のものになる。ただしその後、自分が以前キャッサバの入手先とした人物から、その見返りとして販売を頼まれた場合は、すべての利益を渡す。同じリンボのなかでは、キャッサバを与えることに対して、見返りとなるモノの種

表1 リンボの販売回数と材料の入手先（2003年11月より9カ月間の全販売回数）

	世帯A	世帯B	世帯C	世帯D		世帯E	世帯F	
女性No.	1	2	3	4 <sup>1)</sup>	5 <sup>1)</sup>	6	7 <sup>1)</sup>	8 <sup>1)</sup>
年齢	20	21	21	33	17	31	53	16
耕作面積 (ha)	1.81	1.18	0.33	7.29	0	0.79	1.86	0
収穫可能な面積 (ha) <sup>2)</sup>	1.24	0.35	0	3.48	0	0	0	0
材料の入手先								
同じリンボ								
本人	13	5		24				
父母その他親族	8	10	38	7	44	21	20	15
異なるリンボ								
親族		4				14		
友人・知人		9	3		4		20	
販売回数合計(回)	21	28	41	31	48	35	40	15

(注) 1) No. 4と5、7と8はそれぞれ親子。

2) 2004年7月現在で植え付けから1年半以上経過しているキャッサバの作付面積。

(出所) 筆者作成。

類や数量などを取り決めることを厳密に求められているわけではなく、何かの形で返されたり返さなかったりと大変ゆるやかである。つまりこうした同一リンボ内でのモノのやりとりは、いわゆる一般的互酬性の原則でおこなわれる傾向にある。しかしながら、異なるリンボから入手したロンボを販売する場合は、現金や食事の材料、除草・収穫といった労働など、必ず初めに見返りの条件が取り決められる。

こうした見返りをめぐるやりとりの違いは、同一リンボの者による、若い女性や、または新参の女性への配慮によって生じる。それを知る女性たちは、少ない見返りでも許されたり、時には見返り自体を免除され得る同じリンボの住人を入手先に選ぶほうが好ましいという。

にもかかわらず、女性たちが異なるリンボの者とやりとりをおこなう理由のひとつは、それが次善の策となっているからである。つまり、その時期に同じリンボのなかで収穫可能なキャッサバを耕作する者がいなかったり、親族関係の近い者同士が優先的にやりとりするリンボ内で、新参者になりやすい女性たちは、キャッサバへのアクセスが困難となるのである。しかし、場合によっては、同じリンボにキャッサバを耕作する者がいる時でさえ、異なるリンボの者とやりとりをすることもある。それは移動性の高い女性たちが、なによりも、生活全般を支えるリンボという集団内での関係維持を目指すような思案をおこなうからである。同じリンボの者とでは、見返りがないままとなったり、見返りが少ないといった理由でどうしても不満が生じてしまう。人間関係の安定していない新参の女性たちは、そうして生じた不満が高じて人間関係の不和につながり、やがてリンボを出て行く状況に追い込まれることを回避するために、異なるリンボの居住者ともやりとりをおこな

うのだ、と説明する。

## おわりに

アンゴラからの移住民たちは、移住先の資源制約のなかで、キャッサバに依存した生活を強いられてきた。現金の必要性の増大に伴い発案されたロンボの販売は、唯一の資源であるキャッサバを、継続的に日銭を稼ぐことのできる有力な現金稼得源にもすることを成功させたのである。やがてこの現金稼得活動は、移住民社会のなかでも、頻繁に移動する女性たちに担われるようになった。

移住民女性たちは、キャッサバの不足に際して、キャッサバの耕作状況とリンボのメンバー同士の関係にみられる優先順位や関係の善し悪し等を勘案して、リンボ内外で入手先を変化させキャッサバをやりとりしている。それは、リンボ内でのキャッサバの不足を補うというやむを得ない事情だけでなく、生計を営む基盤である社会組織での関係の維持をも果たすための、彼女たちが移住民としてとり得る数少ない生活戦略でもあった。しかし、まさにそうした戦略によって、移住民社会の特色である移動性の高さが保持されつつ、紛争で帰るべき社会組織が限られる者もそうでない者も、新たな社会ネットワークを構築しながら生計を維持することが可能となっているのではないだろうか。

## 【参考文献】

- Oppen, von A. [1996] *Terms of Trade and Terms of Trust : The history and contexts of pre-colonial market production around the Upper Zambezi and Kasai*. Münster : LIT Verlag.

(むらお・るみこ / 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)